平成28(2016)年「正覚寺報」2月号

◆ご　案　内

①初　講　2月7日(日)10時～

初講は毎年１月末実施が恒例でしたが今年は諸般の事情により一週間遅い開催となりましたが皆様どうぞ宜しくお願い致します。

②仏教壮年会お聴聞の会　2月7日(日)20 時～

総会で継続実施が確認されました。お聴聞の会のお聴聞とは、煩悩具足の凡夫が如来様のお慈悲をユルサレテキク大切の会です。初めてのお方もお誘い合わせてお運び下さい。

③仏教婦人会例会　2月 16 日(火)19 時半～

お聴聞の基本となるのが例会です。新年会ばかりが盛況裏というのではなく、皆様お誘い合せて賑やかなお参りをお待ちしております。

④正覚寺永代経　2月 27 日(土)14 時～

昨年おいで戴いた田淵幸三布教使様にご出講戴きます。大阪芸術大学ピアノ演奏学科の教授であり、正覚寺で誕生した仏教讃歌「ふとあおぎみるおすがたは」の作曲者でもいらっしゃいます。遠方からのお参りも少なくありませんので地元が淋しくなることのないよう皆様にはお誘い合せて賑やかにお参り下さい。

◆なむあみだぶの、居り場がしれた

真っ当な字さえも書けなかった妙好人の「浅原才市さん」が残された歌には、私どもがなかなか行き着けぬ高い境地が歌い上げられています。その一つが**「なむあみだぶの、居り場がしれた」**という歌であります。

なむあみだぶの、居り場がしれた、
どをして知れた。
わしの心に、みちみちて、
なむあみだぶの声で知られた。
ごをんうれしや
なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。

信楽峻麿（しがらきたかまろ）先生は、「才市さんは、生涯をかけて、まことに親鸞聖人のみ教えに生きた人だと思う」とおっしゃいます。

そしてこうもおっしゃるのです。

「仏法の世界というものは、それを深いところで頂戴できる者には、場所を超え、歴史・時間を超えて、確かに伝っていくものだ」と。

親鸞聖人の和語のお聖教に**「唯心鈔文意（ゆいしんしょうもんい）」**というのがあります。その第四条をひもときますと、

「如来、微塵世界（みじんせかい）にみちみちたまへり、すなはち一切群生海の心（しん）なり」（註釈版聖典 p709）と示されてあります。

ここでの「心」は、「いのち」とも捉えるべきものだと信楽先生はおっしゃいます。

煩悩成就（ぼんのうじょうじゅ）の凡夫の中に、既にして如来はみちみちていてくださる。

そのことに気付かせて戴くことができるのは、南無阿弥陀佛の声となって聞こえて下さる如来様のお喚び声に喚び覚まされるときだと才市さんは歌い上げられたのです。

「さあ、称えてご覧」との仰せに従い、南無阿弥陀佛と声に出して称えるとき、如来様の大行が直ちに私の上に働いて下さり、南無阿弥陀佛の声となって聞こえて下さる。

何故かと云えば、私は知らなかったのですが、既にして私の中に如来様がみちみちていて下さったからだと。

南無阿弥陀佛の六字のお心を明らかにされた親鸞聖人の六字釈には、**「如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり」**と仰せ下さって居たのでした。

されば、浄土真宗の信心とは、そのことにまったく疑いがなくなることを指して云うのだと頂戴できることでありました。合掌。